

『乙女の港』における少女表象

鄒 韻

キーワード 『乙女の港』 中里恒子 川端康成 少女 エス

1. はじめに

1.1 「少女」という表象

「少女」という表象は、明治期の教育令公布による男女別学化の後に、徐々に形成された。もともと「少年」という言葉に「少女」も含まれていた¹。日本で最初の少年雑誌『少年園』は少年少女両方をターゲットにした雑誌であったが、1899年の男女別学のカリキュラムの実施とともに、女学生人口が拡大したことを受け、日本で最初の少女向けの雑誌—『少女界』（金港堂）が創刊された。その後、二大少女雑誌と呼ばれた『少女倶楽部』（講談社）と『少女の友』（実業之日本社）が創刊され、多くの少女に影響を及ぼすこととなる²。少女雑誌の読者たちは『少女』の表象、すなわち『少女』をイメージさせる文章・抒情画を読むこと・見ることによってはじめて『少女』を把握³したという。「少女」という表象は、少女雑誌とともに作り上げられたと言えよう。したがって、「少女」の表象の出現は受け手側として少女たちが自ら名乗り、作り出したイメージではなく、むしろメディアの発信者側が願望や規範を投影し、記号化した表象だと考えられる。本稿は『少女の友』を取り上げ、このような表象の発信側の編集方針を対照しながら、少女小説の『乙女の港』を中心に、テキスト外部から内部へ、個の少女から愛し合う少女表象を明らかにし、少女表象に投影されるジェンダー規範について考える。

1.2 『乙女の港』の成立と先行研究

『乙女の港』は（1937年6月–1938年3月、『少女の友』に掲載）川端康成の作品であるとされてきた。しかし1984年に『川端康成全集』（新潮社）の補巻二に、川端と中里の往復書簡が掲載され、『乙女の港』と『花日記』（1938年4月–1939年3月、『少女の友』に掲載）は、女学校を卒業した後に横光利一の弟子となった中里淳子との共同執筆の作品であることがわかった。1935年に『雪国』を執筆した川端は、芥川賞の選考委員にも選ばれるなど既に日本において

名高い作家であったが、何故、走り出しの作家である中里と組み、当時キャンオンとして認められていなかった長編の少女小説を執筆することを決断したのだろうか。確かに川端康成が少女雑誌の愛読者であったことは確認することができる。そして、1926年に川端が発表したエッセイ「少女と文芸」、また後の少女雑誌⁴に掲載される少女小説の執筆、『新女苑』コメント欄や『少女の友』作文欄の投稿選者を務めたことから、少女雑誌という媒体、そして「少女」自体に関心を持っていたことが推察できるだろう。本稿においては、中里との共同執筆に関しては留保し、当時の歴史のコンテクストから、『乙女の港』における少女表象に関して分析を試みる。

『乙女の港』は、連載の終わった翌4月に早くも単行本化され、初版から5年目で47刷に到達し、2011年に再び出版され、絶大な人気を得た少女小説⁵である。横浜のミッションスクールを舞台としたこの小説は、新入生の大河原三千子と上級生のゆかしい八木洋子と克子を巡るロマンチックな少女の間の恋愛物語である。

戦後の川端文学研究は、早期から少年少女小説を視野に入れてきた。大橋（1955）、小林（1978）、深澤（1996）、大森（1997）らは、川端の児童文学活動、川端文学における少年少女小説の位置づけ、川端文学の「孤児感情」と「自己救済」との関連性に関して研究をまとめた。また、中里と川端の往来書簡の発見後、作品論として、中里の草稿と川端の加筆及びテキストと挿絵の比較視点からの研究も進められてきた⁶。本稿は少女表象と少女小説の生成といった大きなコンテクストからこの小説を捉え直し、テキストにおける少女及び少女同士の表象を中心に、ジェンダー視点からテキストを読み直そうと試みるものである。

2. 閉塞的な「夢の世界」とセンチメンタルな少女

『乙女の港』を代表する当時の少女小説が演出する「少女」は、唯一無二の表象ではなく、昭和初期の『少女の友』の編集方針と対照しながら考え直す必要がある。本章では編集方針を明らかにし、挿絵及びテキストから少女表象を究明する。

2.1 編集方針からみる「夢の世界」

1908年『少女の友』創刊時、初代主筆者であった星野水裏による「発刊の辞」が発表された。そこでは、「此『友』こそ実に我が少女を導いて、やさしく、う

るはしく、人に敬愛せらるる婦人となる」⁷と、『少女の友』を「悪習慣」を防ぎ、少女を正しい方向へと導く有益な読み物、と位置づけていた。『少女の友』は、「人物は華美な服装を避け、着衣は銘仙まで」⁸といった少女に適切な服装の指針を示したことが例に挙げられるように、「雑誌の投稿欄、通信欄の一行一句に至るまで細かく気を配」⁹られ、少女を適切な方向へと導く「有益」な雑誌とするべく方針は紙面からも読み取れる。ところが、1931年に、星野に代わって内山基が『少女の友』の主筆の座に就き、就任してから3年目-1934年の1月号において、「街の魔法使ひ」を発表し、雑誌の位置づけを再定義した。

科学の、真を求める世界だけでは得られない、学校の生活だけでは得られない別の美しいものの世界、夢の世界、憧れの世界と云うやうなものがああると思ひますしそして出来るならばそれを、僕は、貴女方にもお見せしたいのです。理科では全部とき明すことの出来なかつた、一つのあこがれの世界、即ち魔法の世界を皆さまにお見せしたいのです。僕は少女の友と云ふ一つの世界の中にそれをきずきたいのです。(中略)

夢だからと云つて、それはさめれば消えてしまふものではありません。心の固くなになつてしまつてゐる大人の世界では、もう夢は生きてゐるすきまが無いのですが、皆さんの様な心美しい乙女の優しい胸の中だけでは夢が豊かにいきづいてゐられるのです。

どうぞ今年も亦健康なよいお嬢様でいらつしやる様心からお祈り申し上げます。

そして少女の友が清らかな乙女の日なつかしい伴侶でいつまでもあるやうにお力ぞへ下さいませ。(『少女の友』・1934年1月号・56～57頁)

内山は、教科書の副読本と位置づけられたライバル誌の『少女倶楽部』との差別化を図るため、少女を適切な方向へと導く「有益」な雑誌を目指す星野の編集方針を転換し、「大人の世界」と分離した「夢の世界」、「憧れの世界」、「魔法の世界」を提示する試みを行った。具体的には、少女の友愛関係を描写する吉屋信子や川端康成といった作家、中原淳一をはじめとする抒情画家を登用した。その後、投稿欄による読者同士の交流が深まり、愛読者大会「友ちゃん」の開催によって「少女共同体」が築かれた。

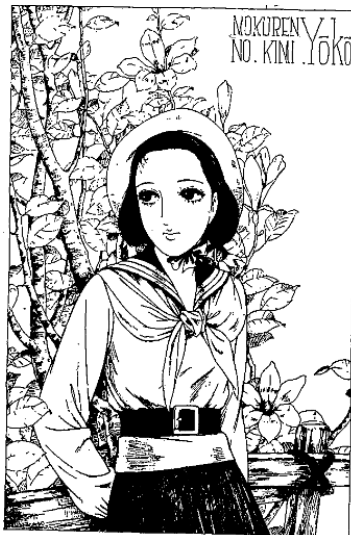
さて、内山の提示する「夢の世界」に基づいて描かれた作品である『乙女の港』においては、如何に「夢の世界」の少女が表象されたのか、挿絵・テキストを分析し明らかにする。

2.2 センチメンタルな少女

川端は、『少女の友』創刊 45 周年の「記念のことば」において「私の小説は挿絵に助けられた。中原さんの絵は「少女の友」で非常な人気であった」と挿絵を担当した中原淳一を評価している。川端と中原は少女小説界の「名コンビ」¹⁰だと読者の少女たちに評価されている。

以下は『乙女の港』から「個の少女」と「愛し合う少女」を描く四つの挿絵を表示したものである。挿絵の中の少女は、現在の漫画の少女像を想起させるような大きな眼、そして弱々しいほどほっそりとした体で、美しい制服姿である。少女たちが漠然とどこかを見つめ空想する様子を、後に川村（2003）は「夢を見る瞳」と表現した。さらに、腕を絡ませて、肩に頭を載せるというような、少女たちの親密な関係を表現する挿絵もある。空想の少女たちを描く挿絵からストーリーの展開は読み取れず、花のような静態的絵しか見えない。Takahashi（2008）はこれまでの小説のストーリーを物語る挿絵とは一線を画し、竹久夢二、中原淳一をはじめとする画家たちが、画家の情緒を含む抒情画という新たなジャンルを創作したと指摘している。

挿絵 1：三千子（『乙女の港』・18 頁） 挿絵 2：洋子（63 頁）



挿絵 3 : 克子 (134 頁)



挿絵 4 : 洋子と三千子 (279 頁)



テキストと対照的に考えると、「小柄で、お人形のように可愛い」、「母の憂いを忘れさせ、家中を明るくする、光りの天使」(43)¹⁾のような三千子、「青みがかった眼、紫光りに黒々とした髪、花のように匂う顔」(32)の心の聡い洋子、「勢いよくペダルを踏む」、「颯爽と飛ばす」(162)、「男の子のように凛々しい、スポオツ姿」(132)の克子が描かれ、少女らしさの多様性が表象されている。一方、挿絵に描かれる少女たちは、読者に視線を向けることなく、どこかを凝視し、無表情で物憂げに描かれることによって、センチメンタルな雰囲気を色濃くする。どの少女の目線からも漂ってくるセンチメンタルな雰囲気が少女らしさの核心と感じさせる。こうしたテキストの外部、いわゆる視覚イメージによって直観的に少女らしさはセンチメンタル、清らかさ、悲しみと結びつけられる。

次に、テキスト外部から内部に焦点を変えて、成人女性、少年との人物関係から少女表象を把握する。

2.3 大人、少年と分化させる少女表象

「夢の世界」という編集方針に基づき、少女以外の登場人物は、教師、保護者である成人女性と、主人公の兄しかいない。成人女性に関する描写がマフーリー先生から伺える。「ミスと呼ばれているが、もう三十と越したらしい顔つき

で、そして「青春を宗教と学問に捧げ尽くして、蕾のまま枯れたような淋しさが見える。」(26)と、マフーリー先生は、美しい花のような少女表象とは対称的に「怖くて」、「蕾のまま枯れた」女性として表現される。また、次に挙げる牛の赤ちゃんをめぐる会話からも、少女の成熟への拒否感を読み取ることができる。

「大きくなると怖いわ。いつまでも赤ちゃんのままでいてくれるといいわね。」

「牛の赤ちゃんばかりじゃなくてよ。人間だって、いつまでも子供でいられたら、どんなに仕合わせでしょう。」(37)

エイジズム的に成人女性の表象が演出され、大人になることを拒否する少女像を読み取ることができるだろう。そして少女は、未熟な「子供らしさ」を演出する。「少女」の猶予期間を象徴する「乙女の港」、いわゆる「守られる港」という空間は「成熟した女」を排除する隔絶された非現実的な少女世界である。

こうした閉塞的な「夢の世界」における少年の表象を三千子の兄から考察したい。三千子の兄である昌三は中学の三年生で、運動好きで、真面目な人物として描かれ、少女世界から排除された存在として読み取ることができる。

「女学生って奴は、毎日逢ってるくせに、手紙なんかやり取りして。」

「お兄さまなんかに分らないの、野蛮人ですもの。」(46)

少女雑誌が表象する少年像は、センチメンタル、感傷的な情緒の少女を理解することができない「野蛮人」として、また「運動好き」「新聞を読む」青年など、少女と性質を異にする存在として語られる。男女別学化が実施されて以来、雑誌によって表象される少年少女像の分化、そしてジェンダーの非対称性を読み取ることができる。

内山の「夢の世界」の編集方針に基づいて描かれた『乙女の港』は、挿絵とテキストからセンチメンタルな少女表象を読み取ることができる。少女は、成熟を拒絶し、少年と分化される存在として表象される。「夢の世界」が演出する少女たちのロマンチックな物語は閉塞的な空間を前提とするものである。次章においては、「夢の世界」の少女間にどのような物語が描かれたのか、「エス」を中心に、愛し合う少女表象を明らかにし、そして、同性による恋愛様式における当時のジェンダー規範の投影に関して考察する。

3. 愛し合う少女たち

3.1 「エス」の意味

「エス」は、sisterの頭文字であり、少女の間の擬似的恋愛関係を表し、吉屋信子の『花物語』（1916—1924, 『少女画報』に掲載）をはじめ、当時の少女小説に多く取り上げられたモチーフである。

「エス」に関して今田（2011）は、戦前の少女たちに熱狂的な支持を得た「エス」は、異性愛文化を排除し、少女同士の親密な関係を演出していたと分析する。さらに「エス」は「家族・男性・強制的異性愛の対抗文化となる」¹²と結論づけた。また大森（1994）は、川端の少女小説における「エス」表象を「親代わりのお姉さま」と論結し、「男性優位社会（現実社会）から侵犯されないことである」¹³とした。川村邦（2003）は「エス」を大正時代から女性同士の心中事件と対照し、「エス」は「霊的な愛」、「究極の愛」であり、「同性の愛」はロマンティックに夢みられも実行されもし、「同性の愛」「エス」の伝説はオトメ文化のなかで密やかに継がれていったのである¹⁴と述べ、「エス」関係とレズビアンとの密接な関係を論及した。

一方、久米（2013）は「エス」をモチーフとした小説を「少女友愛小説」と定義し、「異性愛排除の姿勢が貫かれている」一方、「エス」はあくまでも「統制され分配されることを待つ女子に、主体的な恋愛などを知らせないための配慮としか考えられない」¹⁵と分析している。

愛し合う少女表象は、男性優位社会から逸脱しようとする強制的な異性愛制度への対抗なのか、それともホモフォビア社会で表象されるレズビアンなのか。この問いをもって『乙女の港』の演出される「エス」表象を再考する。

『乙女の港』による「エス」の定義は以下のように説明されている。

「エスっていうのはね、シスタア、姉妹の略よ。頭文字を使っているの。上級生と下級生が仲良しになると、そう云って、騒がれるのよ。」（21・三千子の友達の経子の話）

「エスと呼ばれる以上、相手の靴下のインチから、お弁当の内身、日曜日の行動まで、すっかり知っている……」（238）

と、テキストにおける少女の話にから見る「エス」関係は、同性愛または少女同士の恋というよりも、あくまでも女学生の間における「親密な関係」「仲良し」、であることを意味している。

以下、テキストにおける少女同士の恋愛を中心に、「恋愛」様式の演出に関して考察する。

3.2 少女たちの「愛」―「恋」から「博愛」へ

入学したばかりの三千子は上級生の洋子と克子から手紙をもらった。「エス」を知らない三千子にとって「仲よして、誰とだって仲よくしていいんでしょう」と表されているように、この手紙は女性間の友情の証でしかなく、その中でも「特別に好き」という証であると感じている。そして三千子は、戸惑いながらも少女間の関係は、「楽しいこと」と認識しつつあった。

大雨に遭ったことが転機となり、洋子と三千子の関係は変容し、「仲良し」から「恋」へと目覚め始める。その後、夏休みに軽井沢で克子と偶然に会った時に、克子への恋心を自覚した三千子は、この恋心を洋子に対する裏切りだと感じ、自分の気持ちを素直に牧師に懺悔した。「牧師さま、あたしは悪い子です。お姉さまを裏切りそうですわ。克子さんと遊んでいたら、もっともっと、いけない子になってしまいますわ。」(154) この三千子の台詞から、「一对一の恋」について認識しはじめたことを読み取ることができる。こうしてこの恋愛関係は、軽井沢から帰ってきた三人の間にさらに葛藤を生じさせる。その後運動会で怪我をした克子が、赤十字班に所属する洋子に助けられるという事件をきっかけに、「エス関係」の「恋」は解消されることとなり、個々の恋愛感情、そして独占欲に対しての反省が語られる。

「今まで自分のしていたこと―三千子を自分一人の妹のように、思いきめて、楽しかった、その独占欲のひそかな喜び。克子に勝っているという内心の誇り。

それを洋子は、反省してみる。

洋子は克子を敵にする気はなくなっても、克子にしてみれば、負けた、口惜しい、勝ちたいで、それが克子の心、どんなに意地悪くしていったことか.....。

この春から、なにかと洋子に突っかかって来た克子―それが洋子に思い出されて、自分も悪かったと、今更悔まれる。」(259)

洋子はこれまでの、三千子を自分だけの妹にしようとする独占欲を反省している。そして、克子に対する自分のかつての気持ちへの後悔を語る。また、洋子に助けられた克子の反省は次のように語られている。

「私ね、私なら—もしも、洋子さんが、私のようにお怪我なさったら、いい気味だと思ったかもしれないわ。それなのに、洋子さんは、親切に看てくださいって、直ぐ三千子さんと呼んでくれたり……。私なら、三千子さんには、わざと報せないかもしれないのに……。」(266)

克子はまた、かつての自己のうちのわがままな感情を三千子に打ち明け、洋子の寛容さと自分の度量の狭さを比べて反省する。

克子の凛々しく立派な告白を聞いた三千子はまごつき、恥ずかしさを感じる。

その後、三千子が洋子に対して「お姉さま」と口にした瞬間に、はっと克子の気持ちに察し、黙りこくる場面がある。しかし克子の「いいじゃないの。三千子さんのお姉さまなんですもの。私だって、お姉さまと呼びたいくらいよ」との言葉と共に、「お姉さま」という言葉は「エス」関係における一対一の恋愛関係から仲良しの呼称へと昇華した。

そして、三人を巡る「愛」の物語はクリスマスの日、「博愛」という形で昇華されたと読み取れる。三千子はクリスマスの日、洋子に教会まで誘われ、お姉さまからの贈物を期待しながら教会に向かう。そして教会に着いた途端、クリスマスと思えぬほど貧しい子供たちの姿を目にすることとなる。

「ねえ、クリスマスというのは綺麗な着物を着て遊び廻ったり、沢山のプレゼントを貰うことではないの。自分の喜びも楽しみも、すべてのひとびとと分かちあって、一緒に祝う……自分の持っているものを、貧しい人達に分ける、その喜びを知ることなの。それが、ほんとうのクリスマスじゃないかしら」(285)

三人を巡る「愛」の物語はクリスマスの日、「博愛」という形まで昇華されたと読み取れる。

このように、三人を巡る恋愛関係は、「仲良し」から「恋」へ目覚めたと語られ、さらにその後その三角関係の葛藤は解消され、自分の独占欲を反省し、精神的な博愛という形まで昇華されたと読み取ることができる。筒井(2014)は、「現代恋愛ならびにそれに基づいた同棲、結婚という関係性は、基本的に排外性という規範を維持している」と述べた。「排外性」とは「特定の相手がいるあいだは他の相手と関係をもたない」¹⁶ ことである。ここで語られる少女たちの「愛」は、排外性を排除する「愛」と位置づけられ、「仲良し」から、「恋」へ、さらに「博愛」へと形づけられる。

無論、「博愛」というモチーフは『乙女の港』だけではなく、後の『少女の友』に掲載された「花日記」や「美しい旅」の物語にも連続性が見出される。中里と川端の共同執筆の少女小説、川端による少女雑誌での綴方選評は、「教育的な立場から大きく逸脱することがなかった」¹⁷とすでに指摘されている。しかし、物語における「博愛」は初期の少女雑誌に見られる懲罰という教訓譚から脱し、子供を愛や善へと導くことである。このような物語における教育的機能は十分評価できるだろう。さて、このような排外性を擺脫する少女たちの「愛」はどのように機能するのか、「一対一の恋愛」から「博愛」への展開は如何なるジェンダー規範が投影されているのかを以下に分析する。

3.3 「恋愛」様式への再考

まず、『乙女の港』における「恋愛」様式を再考する。女学生と「恋愛」の関連に関して、Shamoon (2012) は、西洋における「恋愛」・「ラブ」という概念に対応する日本の概念を分析すると、江戸時代の「色」に辿りつくと言った。江戸時代の恋愛物語に登場する「恋愛」の主役は主に芸者であったが、明治期に入ってからには芸者の恋愛物語は下作だと見なされた。そしてその後、女学生を主役とする恋愛物語が出現したのである。また、こうした精神的な恋愛コードは二葉亭四迷の『浮雲』や三宅花圃の『藪の鶯』などの恋愛物語によって形成され、Shamoon (2012) は「日本における精神的な恋愛 (spiritual love) という概念はキリスト教的信仰から文学言説を通じて少女文化の重要な一部になっている」¹⁸と述べた。

さて、こうした「恋愛」様式は少女「愛」を除けば、如何に『乙女の港』に編成されていたのか、テキストの第二章が言及する¹⁹当時の恋愛小説—アンドレ・ジッドの『狭き門』とサン・ピエールの『ポオルとヴィルジニイ』を中心に考察する。『狭き門』は、神の愛のために地上のジェロームの愛を拒否して修道院に入った女アリサが主人公である。『ポオルとヴィルジニイ』は、富裕的なフランスの生活を拒否し、幼馴染の貧しいポオルのいる植民地に戻るヴィルジニイが、激しく荒れ狂う嵐に遭って命を落とすという、美しく悲しい恋愛物語である。二作ともキリスト的な精神恋愛を描写する作品であり、特に、ジッドの『狭き門』は日本近代の恋愛観念に多大な影響を及ぼした作品である。小谷野敦 (2003) は、『狭き門』は昭和時代の恋愛観に深く影響を与えたと述べ、「事実として言うならば、そのような『精神主義的な近代的恋愛は、北村透谷が広めたわけではなく、昭和期のジッドその他の流行、戦後の純潔教育、そして少なくとも数のアッパー・ミドルクラスの女性たちがキリスト教系の学校に通ったことからきているのではないか』²⁰と述べた。本論は、日本近代の「恋愛」

概念成立後の『乙女の港』の物語における少女表象を中心に分析する。上述の先行研究から、日本近代における「恋愛」概念は、女学生を対象とする異性愛、キリスト教の精神的な恋愛（spiritual love）と不可分な関係だと言える。

ミッション学校を舞台とするこの物語は、少女三人物語は「仲良し」から「排外性の恋」へ、さらに宗教的な意味の「博愛」と形づけられる。『乙女の港』において、キリスト教と密接な関係を持つ『狭き門』と『ボオルとヴィルジニイ』にふれられていることから、テキストで編成された「恋愛」様式が、西洋の精神的な恋愛に倣った不完全な恋愛だと言えるだろう。

次に、少女同士による「恋愛」の演出はどのように機能するのだろうか、強制的な異性愛制度への反逆なのだろうか。「恋愛」をモチーフとするこの物語は、少年少女の自由恋愛がタブー視とされる社会において同性による「恋愛」、という新たな「恋愛」様式が語られる。戦前における愛し合う少女の恋は「エス」と呼ばれ、そして戦後、「少女同士のこまやかな心理的なつながり」である「プラトニックな関係」²¹は「百合」と呼ばれるようになる。「百合」という言葉は1970年代の『薔薇族』というゲイ雑誌に登場させた女性同士の恋愛コーナー——「百合族」に由来する。しかし、さらに「少女」と「百合」の結びつきを辿ると、明治期の浪漫主義文学と美術において、恋愛対象の女性の象徴であった「白百合」は、少女雑誌において「純潔という抽象概念を視覚表象」²²を表すことがわかる。戦前の「エス」そして戦後の「百合」と名付けられる少女同士の親密な関係は、同性による「プラトニック」、「純潔」なつながりであり、当時不純であるとされた肉体関係を離脱するものである。

筆者は、こうした少女間の恋愛関係を、強制的な異性愛規範を排除した、同性愛と位置づけることは不適切だと考える。さて、大正時代から同性愛が変態とされる社会的背景の下で、少女同士の「エス」関係がなぜ容認されたのか。1936年に『婦人公論』に掲載された「秘密の姉妹」というコーナーで、片岡鉄兵は当選した女学生同士の恋愛物語について、「同性愛は恋愛と同じか」を題し以下のように述べた。

「たいぐわいの同性愛は、相手に男が出現することによって終る。男の方が好いに決まつてゐる。誰にでも分かつてゐる真理は、同性愛は異性と結ばれる前の、つまり本当の恋愛の代物であるといふことだが、斯く解釈するなら問題は単純だ。社会はもっと女学生たちに男と交際する自由を与へなければならぬ。」²³

さらに「淋しいから同性愛を愛するやうになる」と淋しさを同性愛の起因とし、「異性愛の代物」としての女学生同士の「同性愛」を、代物以下であると認識している。片岡の言葉に代表される当時の保守的な見識も含めて、『乙女の港』を代表とする「エス」物語は、女学生の親密な関係が「所謂異性愛の代物以下のものである」と一般に認識されていたからこそ、爆発的人気を博す少女雑誌に掲載することができたのである。『乙女の港』は、センチメンタルに閉ざされた夢の世界を創造したものであり、少女たちの「愛」はあくまでも友情の延長線に位置づけられ、最終的にはキリスト的な「博愛」という形に収斂されていく。久米（2013）は初期の少女小説における少女の友愛物語が「オルタナティブなセクシュアリティの示唆などではなく、近代家父長制と女子教育制度の堅固な規制に従っていた」²⁴とジェンダー規範を示唆する。また、『乙女の港』における少女の関係において、視点人物の三千子は受け身であり、上級生は男性的な役割を担うことから、「異性愛の男性・女性のジェンダー・ロールが引き写されている」と論じている。そして、『乙女の港』はあくまでも「異性愛とジェンダー制度を踏襲するような物語を展開したのである」と結論付けた。しかし筆者は、登場人物のジェンダー役割から「異性愛を踏襲している」という結論を導くことには疑問を抱かざるを得ない。ジェンダー役割と、セクシュアリティの概念の混同があるのではないか。

物語が語る「エス」はあくまでも異性愛の代物であり、強制的な異性愛規範の補強と言えるだろう。「エス」はセクシュアリティ概念を含まず、精神的な恋愛様式の中で編成され、「博愛」という良妻賢母のジェンダー規範に収斂される。「夢の世界」の演出やロマンチックな「エス」という恋愛の語りによって、少女の純潔—処女性を保ち、そして「愛」が「思いやり、優しさ、情愛」²⁵といった「少女らしさ」「女らしさ」というジェンダー規範を強化すると考えられる。

4. 終章

以上の通り、本稿は『少女の友』に掲載された人気少女小説—『乙女の港』が描く少女表象を考察した。内山基の編集方針に基づいて、『乙女の港』は挿絵とテキスト双方から、「夢の世界」のセンチメンタルな少女像を提示した。閉塞的な「夢の世界」の少女は、大人になることを拒絶し、少年と分化する表象として語られる。少女しかいない「夢」の空間に「エス」の恋愛物語が演出される。少女たちの恋愛物語は「仲良し」から「排外性の恋」へ、さらにはキリスト的な「博愛」へと形づけられた。こうした同性による少女「恋愛」の様式は、

西洋の精神的な恋愛物語の枠組みに囲い込まれると考えられる。排外性的な恋を否定する少女表象は、強制的な異性愛制度への反逆ではなく、オルタナティブなセクシュアリティでもない。ホモセクシュアルな演出はキリスト教的な博愛と位置づけられる、異性愛の代物であり、確固たる強制的な異性愛制度の補強であり、少女に規定された純潔、優しさ、思いやりといった良妻賢母の基準に囲い込むものでもある。

注

- 1 今田 (2013), 31 頁
- 2 『少女倶楽部』の発行部数について、最高発行部数は1937年1月号の49万2千部であったという(大阪国際児童文学館)。一方、『少女の友』の発行部数に関してははっきりとした数字が残っていないが、『少女倶楽部』よりやや劣る程度の発行部数であったと考えられる。
- 3 今田 (2013), 184 頁
- 4 「乙女の港」が、『少女の友』に初めて掲載されたのは1937年であった。それ以前にも『少女倶楽部』(「愛犬エリ」、「駒島温泉」等)や『少女世界』(「薔薇の幽霊」)に幾つかの作品が掲載されていた。
- 5 ここの「少女小説」とは、少女をターゲットとする雑誌に発表され、少女を主人公とする小説であることを指す。
- 6 中嶋 (2010) と鈴木 (2013) の論文に参考。
- 7 実業之日本社社史編纂委員会 (1997), 50 頁
- 8 同上, 49 頁
- 9 同上, 53 頁
- 10 昭和13年4月、『少女の友』における読者の投稿欄:「あの川端先生と中原先生の『乙女の港』名コンビですね。」
- 11 川端 (2011)『乙女の港』, 実業之日本社, 頁数は括弧に表示する。以下同様。
- 12 今田 (2007) 212 頁
- 13 大森 (1991), 14 頁
- 14 川村 (2003), 57~58 頁
- 15 久米 (2013), 179 頁
- 16 筒井 (2014), 581 頁
- 17 毛利優花 (2012), 110 頁

- 18 Deborah Shamoon(2012), 31 頁
- 19 小説の第二章において、三千子と洋子が牛を名付ける場面で、最近読んでいる『狭き門』と『ポオルとヴィルジニイ』の二作にふれている。
- 20 小谷 (2003), 249 頁
- 21 溝口 (2006), 316 頁
- 22 渡部 (2007), 270 頁
- 23 片岡 (1936), 155 頁
- 24 久米 (2013), 188 頁
- 25 古川 (1994), 45 頁

参考文献

- アンドレ・ジイド『狭き門』、岩波文庫、1997 年。
- 今田絵里香 「「少女」になる：少女雑誌における読むこと/見ること/書くことをめぐって」、『ユリイカ』、第四五巻一六号、百七十八～百八十六頁、2003 年。
- 今田絵里香 『「少女」の社会史』、勁草書房、2007 年。
- 大橋清秀 「川端康成の少女小説」、『論及日本文学』、第四巻、四十九～六十頁、1955 年。
- 大森郁之助 「「乙女の港」・その地位の検証 lesbianism の視点ほか、または、八木洋子頌」、『札幌大学女子短期大学部紀要』、第十七巻、一～十八頁、1991 年。
- 片岡鉄兵 「同性愛は恋愛と同じか」、『婦人公論』、昭和 11 年 4 月 1 日、百五十五～百五十八頁、1936 年。
- 川端康成 『乙女の港』、実業之日本社、2011 年。
- 川端康成 「少女と文芸」、『川端康成全集』、第三十二巻、新潮社、1982 年。
- 川村邦光 『オトメの行方—近代女性の表象と闘い』、紀伊国屋書店、2003 年。
- 久米依子 『「少女小説」の生成—ジェンダーポリティクスの世紀』、青弓社、2013 年。
- 小林一郎 「川端康成と児童文学—少年少女小説をふくむ」、『文学論藻』、第五十三巻、八十二～九十四頁、1978 年。
- 小谷野敦 「昭和恋愛思想史(10)ジッド『狭き門』の深く広い影響について」、『文学界』、第五十七巻第十一号、二百四十六頁～二百五十五頁、2003 年。
- 鈴木沙也夏 「『乙女の港』に於ける挿絵の役割と効果—女学生文化の視点から」、『日本女子大学国語国文学会、研究ノート』、第四十一巻、三十七～四十二頁、2013 年。
- 実業之日本社史編纂委員会 『実業之日本社百年史』、実業之日本社、1997 年。

- 筒井淳也 「親密性と夫婦関係のゆくえ」、『社会学評論』第六十四巻第四号、五百七十二～五百八十八頁、2013 年。
- 中嶋展子 「川端康成『乙女の港』論—「魔法」から「愛」へ・中里恒子草稿との比較から」、『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』、第 29 号、一～十四頁、2010 年。
- 深澤晴美 「『少女倶楽部』『少女の友』における川端康成」、『芸術至上主義文芸』、第 22 号、七十～八十五頁、1996 年。
- ベルナルダン・ド・サン・ピエール 『ボオルとヴィルジニイ』、『岩波書店』、1934 年。
- 溝口彰子 「『百合』と『レズ』のはざまで—レズビアンから見た日本映画」、斎藤綾子編『映画と身体/性』、森話社、2006 年。
- 渡辺周子 『〈少女〉像の誕生—近代日本における「少女」規範の形成』、新泉社、2007 年。
- 毛利優花 「同性愛的な精神空間—川端康成「しぐれ」と吉屋信子『花物語』の近似性」、『金城学院大学大学院文学研究科論集』、第十八巻、九十九～一二〇頁、2012 年。
- Deborah Shamoan. *Passionate Friendship—The Aesthetics of Girl's Culture in Japan*. University of Hawai'i Press. 2012.
- Mizuki Takahashi. *Opening the Closed World of Shōjo Manga*. Mark W. MacWilliams (ed.) *Japanese Visual Culture Explorations in the World of Manga and Anime*, pp.114~136. Routledge. 2008.

